

2016年6月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾／

真理の道に入る

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄編訳『阿含經典 2』ちくま学芸文庫(p. 283)／実践の方法(道)に関する經典群／諦相應／5 如来所説／(この經文は4つに分けて考えることができます。今回は、第四の部分から、コーンダンニャに法眼が生じることについて学びたいと思います)

増谷文雄編訳『阿含經典 3』(p. 342)／大いなる死／コーティ(拘利)村にて

(2) 主題

法眼が生じて、法の流れに入ることの意義について、考えてみたいと思います。

2. コーンダンニャに法眼が生じる

(1) 經文

「また、この教えが説かれた時、長老コーンダンニャ(憍陳如)には、清浄にして汚れなき法眼(ほうげん)が生じた。すなわち、すべて生起せるものは、また滅するものであると」(増谷文雄著『阿含經典 2』ちくま学芸文庫、p. 287)

(2) 法眼とは

「清浄にして汚れなき法眼」とは、ありのままの事実をありのままに観る力です。「清浄にして汚れなき」とは、渴愛(自分欲)が混じっていないことです。

(3) 生起するもの、滅するもの

經文に「すべて(条件によって)生起せるものは、また(条件によって)滅するものである」とあります。「生起するもの」「滅するもの」は、ここでは、「苦悩」であると思われます。(括弧内=浪宏友)

(4) 五比丘

成道した釈迦牟尼世尊は、かつて共に修行した五人の比丘を対象にして、初めての説法(初転法輪)を行ないました。このとき、釈迦牟尼世尊の説法を聞いた五人の比丘の名は、次のように伝えられています。

- ・アニャータ・コーンダンニャ(阿若憍陳如)
- ・ヴァッパ(婆敷)
- ・バツディヤ(婆提梨迦)
- ・マハーナーマン(摩訶摩男)
- ・アッサジ(阿説示)

(5) コーンダンニャに法眼が生じる

釈迦牟尼世尊の説法を聞いて、コーンダンニャに、法眼が生じました。預流(よる、法の流れに入る)の境地に入ったのです。

コーンダンニャは、釈迦牟尼世尊の説法によって誕生した最初の聖者(しょうじゃ)となりました。

(6) 神々の讃嘆

これを見た多くの神々が、釈迦牟尼世尊の説法と、聖者の誕生を、こぞって讃嘆しました。

3. 釈迦牟尼世尊の歓び

経文では、神々による讃嘆の経文に続いて、釈迦牟尼世尊の喜びの様子が述べられています。

(1) 経文

「その時、世尊は、歓喜の声をあげて仰せられた。

『まことにコーンダンニャは覚った。まことにコーンダンニャは覚った』

かくして、長老コーンダンニャは、〈アニャータ・コーンダンニャ〉(覚れるコーンダンニャ)の名を得たのである」(同書、p. 288)

(2) 釈迦牟尼世尊の喜び

コーンダンニャに法眼が生じたとき、釈迦牟尼世尊は、躍り上がらんばかりに喜びました。そして「アニャータ」と、ニックネームまでつけました。(釈迦牟尼世尊には、結構、お茶目な一面があったようです)

(3) コーンダンニャの出家

他の経文によれば、このあと、コーンダンニャは自ら願って、釈迦牟尼世尊の弟子になったとあります。

釈迦牟尼世尊の最初の弟子となったわけです。

4. 五人の比丘の出家

コーンダンニャに続いて、ヴァッパとバツディヤに法眼が生じ、預流の境地に入って、釈迦牟尼世尊の弟子となりました。

さらに、マハーナーマンとアッサジにも法眼が生じ、預流の境地に入って、釈迦牟尼世尊の弟子となりました。

こうして、五人の比丘に法眼が生じ、預流の境地に入って、釈迦牟尼世尊の弟子となったのです。このとき、僧伽(さんが、そうぎゃ=仏となるための道を修行する人たちの集団)が、始まったとされています。

5. 六人の阿羅漢

五人の比丘が法眼を得てから、さらに釈迦牟尼世尊の教えは続きました。そして、ついに、五人の比丘が阿羅漢の境地に達しました。

そのとき、釈迦牟尼世尊は、「世間に、阿羅漢が、六人となった」と言って喜びました。六人の阿羅漢のうちの一人は、釈迦牟尼世尊です。

「仏陀と五人の阿羅漢」ではなくて、「釈迦牟尼世尊を含めた六人の阿羅漢」であることに留意したいと思います。

6. 聖者

(1) 自燈明・法燈明の実践

聖者とは、自燈明・法燈明の実践をしている修行者と言ってよいと思います。出家でも在家でも、自燈明・法燈明を実践していれば聖者の一員です。

(2) 聖者の四果

聖者の悟りには、四つの段階があるとされています。これを聖者の四果と言います。

| | |
|-----------------------|--|
| 須陀洹(しゅだおん) 預流(よる) | 法眼を生じて、法の流れに入ったけれども、煩惱は残っているので、油断をすると迷いに陥(おちい)る可能性がある。 「預流」は、法の流れに入った初歩の聖者の意。 |
| 斯陀含(しだごん) 一來(いちらい) | 煩惱の断滅が進んでいるけれども、まだまだ不十分で、迷いに陥る可能性がなくなったわけではない。 「一來」は、もう一度だけ生まれ変わって悟る者の意。 |
| 阿那含(あなごん) 不還(ふげん) | 煩惱の断滅が進み、迷いに陥る可能性はなくなったけれども、まだ煩惱の残りかすがある。 「不還」は、もう迷いの世界には戻ってこない者の意。 |
| 阿羅漢(あらかん) 応供(おうぐ) | 煩惱を完全に断滅し、釈迦牟尼世尊と同じ境地に入った。 「応供」は、供養を受けるにふさわしい者の意。 |

(3) 険しい道のり

- ① これまで、渴愛（激しい自分欲）、煩惱（貪欲・瞋恚・愚痴など）で生きてきた人が、四つの聖諦の教えを受け、三転十二行を實踐して法眼を生じ、法の流れに入りました。この段階が預流（須陀洹）です。
- ② この段階は、法眼は生じたものの、渴愛・煩惱はそのままです。法を實踐しようとする自分の奥から、渴愛・煩惱の衝動が突き上げてきます。この衝動に打ち勝って、法を實踐し続け、渴愛・煩惱を滅しなければなりません。
- ③ 渴愛・煩惱を完全に滅したとき、阿羅漢の境地に入ります。これが修行の目的となります。
- ④ 預流から阿羅漢までの道のりは、自分との闘いの険しい道のりです。聖者の四果に、一來・不還という段階が示されているのは、この険しさがあるからではないかと、私は考えています。

7. 流転・輪廻

釈迦牟尼世尊が、入滅を前にした最後の旅の途上、コーティ（拘利）村に立ち寄ったとき、弟子たちに、次のような話をしたと経文が伝えています。

(1) 経文（抜粋）

「『比丘たちよ、四つの聖諦を、よく了得せず、通曉せざるによって、かくのごとく長きにわたって、わたし（釈迦牟尼世尊）も、また、そなたたち（比丘たち）も、ともに流転し、輪廻したのである。その四つというのはなんであろうか。

比丘たちよ、苦の聖諦を、よく了得せず、通曉せざるによって、かくのごとく長きにわたって、わたしも、また、そなたたちも、ともに流転し、輪廻したのである。

比丘たちよ、また、苦の生起の聖諦を・・・

比丘たちよ、また、苦の滅尽の聖諦を・・・

また、比丘たちよ、苦の滅尽にいたる道の聖諦を・・・』」（増谷文雄編訳『阿含經典3』／大いなる死／コーティ（拘利）村にて、p. 343-344）

(2) 釈迦牟尼世尊も凡夫だった

ここに、釈迦牟尼世尊も比丘たちも、かつては流転・輪廻していたとあります。

釈迦牟尼世尊も、かつては、迷いの人生を送る凡夫だったのです。その原因は、四つの聖諦を了得せず、通曉しなかったことです。

四つの聖諦を三転十二行してマスターするまでは、苦悩を正しく解決することができず、法眼を生ずることもなく、迷いの人生を送り続けるしかないことが、ここに示されていると思います。

8. 解脱

(1) 経文（抜粋）

「『しかるに、比丘たちよ、いまや、われらは、苦の聖諦を、よく了得し、通暁したのである。

また、比丘たちよ、いまや、われらは、苦の生起の聖諦を・・・。

また、比丘たちよ、いまや、われらは、苦の滅尽の聖諦を・・・。

比丘たちよ、また、いまや、われらは、苦の滅尽にいたる道の聖諦を・・・。

かくて、われらは、生への妄執を断ち、生のきずなを滅したので、もはや、迷いの生を繰り返すことはないであろう』」（同書、p. 344～345）

(2) 解脱

釈迦牟尼世尊も、比丘たちも、今は、生への妄執を断ち、生のきずなを滅しています。そして、もはや迷いの生を繰り返すことはないという境地に達しています。いわゆる解脱の境地です。

それは、四つの聖諦を了得し、通暁したからです。

(3) 凡夫から聖者へ

現在の私たちも、四つの聖諦を了得し、通暁して、苦の滅尽にいたる聖諦が明らかにした八つの聖なる道を実践すれば、解脱へ向かうことができます。

この経文は、釈迦牟尼世尊を手本にして修行しなさいという、私たちへの励ましであると受け取ることができます。

9. 在家修行者と煩惱

庭野日敬師は、在家修行者における煩惱について、次のように述べています。

(1) 出家と在家の違い

「煩惱はすべての人間がもっています。出家の修行者はその煩惱から完全に離れてしまうよう努力しなければならないのですが、ふつうの生活をしている在家のものにとっては、とうてい不可能なことです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 124～125）

(2) 煩惱に善い方向をあたえる

できないことをやろうとするのは、自然の道に反します。そこで、一般大衆には、煩惱に善い方向をあたえることをおしえられたのです。それが大乘の道です。たとえば、「金もうけをしたい」という煩惱に、「世の中のためにはたらく」というよい方向をあたえれば、おなじようにはたらき、おなじように金をもうけても、それが善のエネルギーになるわけです」（同書、p. 125）

10. 在家の聖者

(1) 青頸の孔雀

スッタニパータに次の句があります。

「譬えば青頸(あおくび)の孔雀が、空を飛ぶときには、どうしても白鳥の速さに及ばないように、在家者は、世に遠ざかって林の中で瞑想する聖者・修行者には及ばない」(中村 元訳「ブッダのことは スタニパータ」岩波文庫、p. 49)

庭野日敬師が言うように、在家者は、煩惱から完全に離れてしまうことは不可能であることを、この句は述べていると思います。

(2) 在家の預流

在家者であっても、預流(須陀洹)の境地に入ることは不可能ではありません。煩惱を捨てきれなくても、法眼が生じて、法の流れに入ることは可能だからです。

要するに、在家の生活の場で、自燈明・法燈明を実践すればいいのです。

(3) 周囲に引きずられずに

① 在家者の活動する場は、家庭であり、職場であり、世間です。周囲は六道を歩む人々で満ちています。

財を消費する量が多ければ多いほど、幸せなのだと信じて疑わない人々。

自分の思いが通ることが、自己実現であり、生きがいなのだと威張っている人々。

年がら年中、不平不満を並べ立てている人々。

相手かまわず争いを仕掛け、混乱ばかりを起こしている人々。

気に食わないことを見つけては、怒鳴り散らしている人々。

そのような人々の中で、自燈明・法燈明を実践し、真の人間として生きていくのは困難を極めます。

② そのような人々の言動に引きずられることなく、自分のなすべきことをなしながら、法の実践に取り組む。そのような努力を続けることが、真の意味で自分を大切にすることであり、真の幸せを得る道であることを、釈迦牟尼世尊は語っていると思います。

また、このことは、多くの事例が証明しています。

私たちは、法の働きを信頼して、乱れようとする心を整えながら、法の道を、一步、一步、歩み続けたいものだと思います。